五元集

其角句集 元

寶晉齋其角發句選

# 誹諧 五元集

浪華 文貨堂梓



是ハ英集元亨秋書あとききこえしる
集編ありけるそれらしの草をやりて
そのころむせられけりこれハ延宝ニはしまり
く寶永にに終るその間五元をあつさあ
するの板ありしかあるに晋子の滅後
にいたつてすれ人の家にわりともされ
をしてありしも正徳より今延享まで
にこれも文五元を捜りさへまてその名
乃久しくきこえしく此集の世にかくれ
まうすやこてま園ゆまをまくまうり

百萬坊音原

越おの人の土産をあめて
光廣つのうきをかりい会ひう
謂なれもすゝてつをも袖て掛
元角田川牛田とらいふまて
いそのうき法のこゝろ見知り楊
波舟緒よ帰さうつて
貫之の館のすゝしみよりみは
まあんけの一句を扇よ書れて
生の松りうのうしをよた
求肖物とや深き味を考へ
市 冬まて
出もむせ 枯木の小町 千れさう

手まと家も林檎ハ油て面白し
百日乃あくら過しや悦ひ鍾
皿孫よ弱のけあけや 心てん
泉のあとは私うままの祭は
七日
辞すめる人の手なひて敬は
山王の氏子として
物写と天下祭や 土ろゝま
番附をとらも みなの手なひは
松原よ田舎歩や 昼休ゝ

甚痩の疑問しりも少食し
と云ふ天地を着る夜衣

高閣挽涼

香薷散おもねふつて雲の峯
蝙蝠は宇治のさとしや一墨
蟖をまてあそへ年
うきし舟の涼しおや へかまの甲
ねてうとく蓮の花そよ鶴頭

大雨大風

吹降の合羽そよく柿梭扒

五人集

淡雪やゆふべに見し君か顔
室井のけれの翁

傘指て月に隠れするゝ也
雨毎に宿替の袖の露
名月やとて住者のつれづれ
名和月
小くらきに見る月や明石浦

雨

弱しても蚤貫猪かなしき
川筋の関屋よいくつ



鉄上

上林佐野

秋月やいつをむかしの男山

水相観ノ絵ニ

ふみすてゝよめをもみし水の色

名月や居酒のまへを頬かむり

得蟹無酒

蟹を画て夜を遣する月哉

名月や夜をのつゝむ松の影

雨

納屋に酒雨はれてけふの月

名月や舟を定むる松の雁

見ゝゝよも跡起て月の色

はつしほ

男とも祢宜の鉾や秋の月

紀川いくせもあり

まつ舟の篝は消えやこよひの月

所思

ゆきしひも心つくしや十四日

名月や金くろひ子の雨の友

園のあハ吉祥ハかり月あかり

月出て往来絶く小舟かな

人音や月さんと鳴は伏見船

維摩のさん

山のえハ大衆しらう床の月

張良圖

胸中乃雲出るあく乃月

布袋の月を掬ル讃ニ

すくてあまし水の月や九てな

寺

ちる月ふしら膾ハ笑まもらん

名月やちくやく法ふ袖ル払

あうをれてやゝ

烏帽子座ハみなかしこてんとうの月

闲倚橋

猿邊にくらるんとや橋乃月

含杏亭

霜まゝ入日を見捨やきかゝる月

風雨

雷に揮ハあかりきて月さん舟

小野川りんてみうに餞

入月や琵琶を袋におさめけん

三日體をてむかいしふ

名ぐる十出に錢を握りけり

書初し是仏とし八寸の巻柱

座右銘

行年や築地取る覚書

乳母かえて志ても義女ある年忘

御簾の中百殿よう〳〵しろり

のりものゝ中よ眠沢し

年忘し刈伯倫もありハ又て

震懐流火志つすりて

妹子ゆ薑とけて餅の番

煤掃てわれしあるハ女房あつしや

宗匠まをもつゆる節し

おりしの燗お国すあり

行年の牛洗ひゆうり年の暮

賑鬼五つの子を産り襟中よ

やしなをりてあゆわりけん

耳をいそひろ

年たとる兜子被へ数ぬ豆

すはしの浴し浣て世捨哉

童ゐハ志て乃取中や煤ちらび

忠信ゝ芳野仕逃やおはらひ

有かしき親の悋氣も梅花

閑窓ニ羽箒をめて

蝶こもつもれて入の陰なれ
鼻をも掃孔雀の玉や蝶つよし
御蝶々翁ハ竹叟

千山家とし立ぬ

則すゝや八乙女神楽男あり
揚屋ニ酔房して
慰の傳義経篭を作らへ留

里の市せれをよふるし那織らぬ
小路城河て若わさんとし於皆
山陵の走家を滅ほすしてハすけ
世子の飛落しける気中
万世人とりて
餅の粉や落雪こる杯の咲
行家云面白法無の巻軸
和の作乃刀をはけたる詠柴據

市隅

弱法師家門ゆかせ餅の札
朽敗堂の夕日寺う通ふ園於晷

冬ちる松あるよ市の夕なゝし
自悔 三十
おきりては青の夢へきき夢の露
大津驛
千観の言もせいしやしゞ花
雪窓
損料の史記を師走の雪ふ
弟の膝やひとめのむ移の物思
沢集や 谿評定 投閣去

是より別して勝負を決
主将の心に英雄の臣を以
て馳走せらるゝ所神妙也
卯境の条の事第一
成ゑしとて白綿つきの
放ち給る東ハお坂山南ハ
三田西ハ穴生山ハ有乱
り鎮護を作して先一ッ
の新書を認らる執
治雑坊の何某筆を
取て田饒の詞をかり從
奉り謀を顕して神明

勝負を決すること十三番かつて
雛の事はこの此度妻細工申されし
私の夜の千疋をとて称をまいらせ
ともに思ひ給ひて申しけるに
おんての司とて貝合揃ひ
御それ貝ハ箱弓ハ袋に入れ
ていをとて鳥の跡を写し
もし正木のかつら永し
とらへて其の花の時の
鼓をならしてぞ奉ける



烏沙汰曰

義安二年五月二日東山の
仙洞にて雛合の事ありけり
公卿侍従僧徒上下の心面の輩
常に祇候の者とも左右をわけ
てかられ賢の賢木なつて
其の松中も岡山ハ尺の銀臺
をも居て藤の花をかけけれ
これ橘樹薔薇牡丹山吹の
作り花をさしそへて今人
参集して春開なる御堂
の山の青山のをうつして

草簾を吹和琴をまし笛
嗟歎の舞楽をおこして
爰両方の雑をなし給ふ

一番

左　右衛門督の鳥家　無名丸

右　五條大納言の家　千代丸

以上十二番　左勝卯番右勝六番
と記す哥女舞妓興遊し
絶ず此間盃を勧む記録
放宴さりとりても万代の
義談を傳ふ黄昏て
あらつておのつく是を此事
中御門の左大臣殿の御しる
つくりて奉りし人経房
朝臣書奉りけるとか其代
の記なとひ合を持るもの
になし是なり也
ちかくよそふことひかれまりて

花なりの後に咲て
唐子へ受けし

左右總計

麗人　二句
五字　十四句
三字戢　十八句
二字　卅六句
雁形乙　五十二羽
乇　十六點

寶晋齋撰

五元集 拾遺

貞 一

# 五元集拾遺

## 春之部

日の春をさすがに鶴の歩ミ哉

年立や家中の礼は星月夜

松かざり伊勢が家買ふ人は誰

神明町に居をしめて

行年の松もてくるかざり哉

鶯ひとり書見の如日ハ寝し深れ哉

鶯さりわすれ歎く閑出て千々の哉

ひさしく登てつきしくのこ
とよりみふらきすきとゐに
すゑとすしやりれよ

馬嚢紙よこころはかきはらふ姿を
あら根口ひしきろきみ袖

我兆て桃梅柳しらすき酒
縁のむらさきえか花乃おはな

追加

あらずさや心をぬりよ浮花主
修行り国柄人ごま免参してよ

天智天皇

あおきむ入唐の首尔四海波
夏和紙きし清み嘆をかし寄

藤金まて

山猿の額の夜れあ川さう部

画賛

修行や萬の月よりハよし聖 山

妙法蓮華経

まへなりや法の蓮の花華纏

雪斎亭の花見にまかりて

何をとむる旅寝かりの宿桜

自画讃

障扉やさし紙を夏比絵合

囲より大工石かりむ後の梅

九條殿御下向

催馨なしとの八日人さやむかし御

御殿端に馬休めかり大根引

御作夜をさきならへと大根引

綾洲久能の別当さしさめ

かして法をつかはしを

めしさや御年賀の蹉盗

旹延享四丁卯年秋八月全編校合

成

百萬吉源

續五元集 其角附合 全部三冊 出来